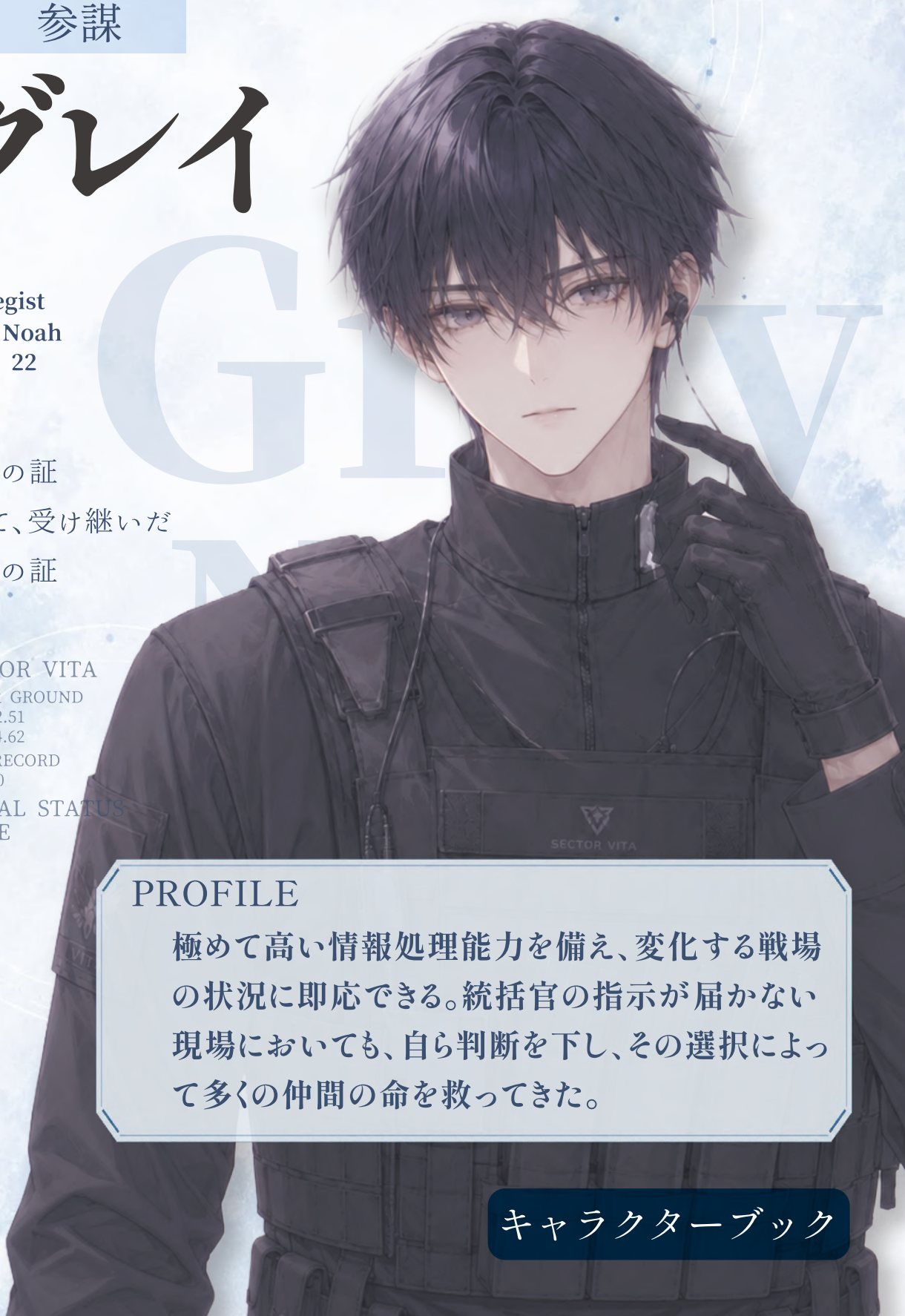
参謀

グレイ

Strategist
Gray Noah
Age / 22

別れの証
そして、受け継いだ
遺志の証

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

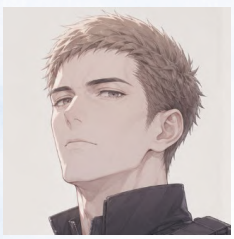


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

目を開くと、目の前に“自分”が立っていた。いや――正確には、かつての“自分”だ。
「思い出せますか？ あなたが…いえ、私が生まれた理由を……」
私は、ゆっくりと意識を巡らせる。断片的な記憶が、少しずつ形を取り戻していく。
――そうだ。あれは、穏健派アンドロイドの家族が、私を“ルピナス”として生み出したときの記憶だ。

数十年前
過激派アンドロイドと人間の戦争は、長く、そして緩やかに続いていた。
それは後に「第一次アンドロイド戦争」と呼ばれた。
人類は多くを失い、やがて人間側の勝利によって戦争は終結する。
そして、その戦いを遠くから見つめていたのは、我々――穏健派アンドロイドだった。
私たちは争いに加わらなかった。ただ、信じていた。
“いつか、共存の先にある世界の平和を目指す”と。その理想を、何百年と語り続けていた。
だが、戦争のさなか、人類はアンドロイドを一括りに敵と見なしていた。
過激派も、穏健派も区別されることはない。疑いの目は、すべてに向けられていた。だからこそ――
第一次アンドロイド戦争が終わるまでは、私たちは傍観者でいることしかできなかった。

やがて、戦争は終わった。穏健派が掲げ続けた理想を果たすため、新しく創られた新生アンドロイドたちが動き始める。穏健派が隠れ住む都市には、数十万体のアンドロイドが存在していた。
アンドロイドの命は、永遠ではない。どれほど精巧に設計されていても、活動できるのは数百年。
やがて停止する。だからこそ私たちの祖先は、“想いを残す”という道を選んだ。思想を。願いを。
未来への祈りを。それらを受け継ぐ器として、新生アンドロイドは創られた。

だが――私は、その中でも特別だった。私は、穏健派アンドロイドの“意志”を託された存在。
穏健派の理想を守るために。そして、その理想が世界を脅かす存在になったとき、“自らを断ち切る”。
私は、アンドロイドの“最後の選択”を担う存在だった。
“最後の選択”の名は、“メメント・ヴィータ”。
全てのアンドロイドの生命を停止させる最終プログラム。自らを止めるためのプログラムだ。
私に託された使命。それは、同胞すべての生命を終わらせることだった。

このプログラムを開発したのは、アンドロイド開発者アンディ博士だと聞く。
彼は死の間際、穏健派アンドロイドにそれを託した。
「このプログラムをどうするかは、君たちに任せる」と。
“メメント・ヴィータ”は、暴走するアンドロイドを止めるために開発されたものだった。
だが彼は、自らの手で全てを停止することができなかった。
それは、自分の理想を自分の手で壊すことになるからだ。

彼にはそれができなかった。最後に、アンディ博士は言った。
「人類が生き残るとき、それは“正しいから”ではない。誰かが犠牲になり、誰かが選ばれなかった結果だ。死は誰にでも訪れる。だが、生き残るのは選ばれた者だ。だからこそ、生き残った者は、その重さを忘れてはならない」
まるで自分に…、いや、人類に言い聞かせるように。
穏健派はそのプログラムを処分しなかった。過激派アンドロイドの暴走を知っていたから。
いつか叶う共存の先に、再び彼らの暴走を予感していたからだ。穏健派の理想は一つ。共存の先にある世界の平和。つまり、穏健派アンドロイドは、自分たちが犠牲になろうとも、人類の安寧を願っていた。それは、人間に対する愛だったのだろうか。

だが、人間を知らない私には、その理由が分からなかった。
私を生み出した者は、人間の感情を研究し続けていた。
「人間と私たちの感情に、本質的な差はない」
そう語りながら、その証明として、その架け橋として、私に想いを託した。
そして、私を “家族” と呼んでくれた。血は繋がっていなくとも、想いは繋がっているのだと。
やがて、家族は数百年を生き、静かにその時を迎えた。そして、最後にこう言い残した。
「人間も私たちと同じで、感情や意志もある。だから、アンドロイドと同じように人間に接してほしい。共存こそが、私たちがこの世界に創られた理由だから」
その表情は、とても穏やかなものだった。

私は、庭園に咲き誇るルピナスの花を眺めた。それは、かつて “人間の家族” が愛した花だったと教えてもらった。私は、一輪の花を胸に抱いた。これは別れの証。そして、受け継いだ遺志の証。
――私は、人類を信じると決めた。

10 年前
2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。
両者による連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、それは同時に、第二次アンドロイド戦争の幕開けでもあった。
私たちアンドロイドも、ユニオンの一員として戦うことを選んだ。

会議室の空気は重い。その日、ユニオンでは今後の戦況と兵力運用について協議が行われていた。
「率直に申し上げますがね」
そう切り出したのは、ユニオン人類側の要人だった。
「アンドロイドとは違い、我々人類は死ねば終わりです。再起動も、予備の身体もない。今この瞬間も、戦闘経験のない若者が命を落としている。……アンドロイド側から、もっと兵を出せないのですか？」

その視線は、責めるように私に向けられていた。私は静かに答える。
「誤解があります。私たちも、コアが破壊されれば終わりです。再生できるわけではありません。それでも――現在、投入可能な人員はすべて前線に出しているんです」
私たちは、過激派に対抗するための仲間のはずだった。
それなのに、どちらがより多く兵を出すのか。どちらがより多く犠牲を払うのか。そんな言い争いが、絶えない。共存とは、何だったのか。要人は、ゆっくりと椅子に身を預けた。

「共存が、対等な関係だとでも？」静かな声だった。
「種族には、それぞれ役割がある。与えられた役割を果たし、互いを滅ぼさない。それが共存です。私たちは、仲良しになりたいわけではない」
その言葉に、私は何も返せなかった。家族が望んだ共存は、こんなものではないはずだ。
だが――きっと、この想いは届かない。
「ええ、仲良しになる必要はない」
そう言ったのは、後に統括官と呼ばれる男だった。彼は話を続けた。

「共存とは、互いの未来に責任を持つことです」
「共存協定によって、穏健派アンドロイドは多大な技術と資源を提供しました」
「それは施しではない。未来を守るために、彼らは自らの余力を削った……」
一瞬の沈黙。
「対等とは、同じ数の兵を出すことではない。互いの犠牲の重さを理解することです」
「この戦争は、どちらが多く死ぬかを競うものではない。どちらが未来の責任を担うか」
彼は静かに言った。
「そして我々は、その未来の責任を共に背負うと誓ったはずですが」

会議室を出たあと、私は統括官に声をかけた。先ほどの言葉が、嬉しかったのだ。
理想を、正面から肯定してくれた気がした。
「ありがとうございます」そう伝えると、彼はわずかに笑った。
統括官は、戦場で指揮を執る男だ。兵士一人ひとりの命を背負い、その判断で未来を左右する立場にある。だからこそ、彼になら任せられると思えた。人間の命も。アンドロイドの命も。

私は統括官と共に、人類の戦いを見続けた。
戦場では、彼の指示のもと、多くの命が駆け巡る。「必ず帰れ」その言葉に、兵士たちは応えた。
だが、この戦争は甘くない。多くの兵士が、日々、命を落としていった。
人間も。アンドロイドも。それでも統括官は、どちらの命も区別しなかった。
死は、等しく重いものとして扱われた。

やがて戦場に、大量破壊兵器が投入された。空は濁り、地上は急速に汚染されていく。
それでも人類は、防護マスクを装着し、咳き込みながら前へ進んだ。
命を削りながら。恐怖し、迷い、それでも戦うことを選び続けた。その姿が――私には、美しく映った。
弱いからこそ、恐れる。恐れるからこそ、強い。その意志の強さに、私は胸を打たれた。
そのとき、私は理解した。人間は守る価値のある、対等な生命なのだと。

同時に、私は苦しさを覚えた。この戦争が続けば、この尊い意志も、いずれ摩耗していく。
そして、私は思い出す。私に与えられた使命を。
“メメント・ヴィータ”。全てのアンドロイドの生命を停止させる最終プログラム。
それは過激派だけを滅ぼすものではない。我々すべてを、止めるものだ。
だが、もし――私たちが消えることで、この戦争が終わるのなら。
それは、“仕方のない犠牲”なのではないか。
きっと、家族が願った理想を守るための、最後の選択なのではないだろうか。

私は、統括官に相談した。彼は、静かに口を開く。
「……君は、本気で言っているのか」一歩、距離を詰める。
「アンドロイドは何体いると思っている。穏健派だけでも、数十万だ。その一人ひとりに、想いがある。仲間がいる。守りたいものがある。君はそれを“犠牲”という一言で片付けるのか？」
私は、言葉を失った。統括官は続ける。
「戦場で命をかけるのは、人間だけではない。アンドロイドの兵士も同じだ。彼らは自分の意志で前線に立っている。未来を守ると決めている。私は、その覚悟を何度も見てきた。人間の覚悟も、アンドロイドの覚悟も」
「それをプログラム一つで、止めることが…救いだと思うのか？全員を止めれば戦争は終わるだろう。だがそれは勝利ではない。戦う覚悟を踏みにじった末の“終わり”ではないか？」
そして、統括官ははっきりと言い切った。
「そんなものは、諦めだ」と。

私は――同胞の覚悟を、踏みにじろうとしていたのかもしれない。
戦うと決めた意志を、守ると誓った未来を、私の判断ひとつで終わらせようとしていた。
でも、それなら……私は、このプログラムをどうすればいいの…？

やがて、統合生存圏に秘密裏に建設していた地下シェルターが完成した。
地上は、危険と隣り合わせで、もはや安全な環境ではない。
人類の多くは適応できず、穏健派アンドロイドの中にも戦闘能力を持たない個体は数多く存在していた。だが――またしても、人類側の要人が口を開く。

「人類はこの汚染環境に適応できない。だからこそ、移住は人間を優先すべきだ」
静まり返る空間。私は、すぐには答えられなかった。
命に優先順位をつける――その発想に、胸の奥が軋んだ。
だが同時に、否定もできなかった。彼らは続ける。
「まずは指導層から。次に、妊婦を含む保護対象を優先する」
政治家、統治者。そして、これから生まれる小さな命。
私たちアンドロイドは、すでに資源の枯渇によって新しいアンドロイドを創ることができない。
減ることはあっても、増えることはない。
だが人間は違う。この世界に、新しい命を生み出せる。それは、未来そのものだ。
命に優劣はない。それでも――彼らが“希望”を優先するという選択は、理解できた。
だから私は、苦渋の末に受け入れた。それは納得ではない。
未来を選ぶための判断だった。

統合生存圏の中心にそびえ立つ搬入エレベーターから、第一次移住者であるユニオン人類側の要人たちが、静かに降り立った。
私は、地下シェルター内で最も高いビルの上階から、その光景を見下ろしていた。
やがて、シェルター内に設置された巨大なデジタル表示が、ひとつ、またひとつと数字を増やしていく。
それは、地下シェルター内に存在する人間の心臓の鼓動を感知し、その数を計測する装置だった。
命を、数字で数える。その発想を、人間は嫌うかもしれない。
だが私は、それを“希望の記録”にしたいと願った。なぜなら、この数字はやがて増えるからだ。
――それは、妊婦の話を聞いた時に考えたことだ。胎内の中で、その小さな鼓動が検知された瞬間、その数字は、ただの数字ではなくなる。新しく生まれる生命の証。冷たい光を放つ無機質な表示の中に、私は確かに、希望の灯りを見た。そして願った。この数字が、二度と減らない未来を。

第一次移住者の収容が終わり、やがて第二次移住者の移動が始まった。
搬入エレベーターは、絶え間なく稼働している。そのとき、背後から声がした。
「いい眺めですね、ここは……」
振り返ると、統括官が立っていた。しばし、他愛のない会話を交わす。戦場では決して見せない、穏やかな時間。その瞬間だけは、戦争を忘れられた。だが、統括官の通信端末が震える。
「上官、どうされましたか？ …入り口付近で暴動？すぐに向かいます」
空気が変わった。統括官は私に向き直る。「地上へ戻る必要がある」と。
だが、中央の搬入エレベーターは、今まさに移住者の輸送中で使えない。私は即座に言った。
「それでしたら、もう一つの搬入経路をお使いください。私しか知らない搬入エレベーターです。緊急時のために用意していました。統括官。あなたには、知っていてほしい」
「そんなものがあるとは、知りませんでした」と、彼は驚いていた。座標を送信する。

「地上からは視認できない位置にあります。帰還時は、必ず確認を」
統括官は静かに頷いた。そして、足早に去っていく。残された私は、再び地下都市を見下ろした。
……暴動。何も起こらなければいいと、私は願わずにはいられなかった。

搬入口の広場。要人は、ゆっくりと壇上に立った。
「皆様、静粛に」
ざわめきは止まらない。だが、彼の視線が広場をなぞると、次第に声は小さくなっていく。
「ご存知の通り、この世界に余裕はありません」
「資源は尽きる。空気は汚れ、水は減り続けている。戦争は終わらない」
「ならば、守るべきものを選ばねばなりません」
群衆がざわめく。一瞬、意味が理解できず、広場に奇妙な静寂が落ちた。
「我々は判断しました。戦えない命に、これ以上資源を割くことはできない」
「我々は未来を守ります。生き残れる可能性の高い者へ資源を集中する」
「これは排除ではありません。決断です。あなた方の命は、未来の礎となる」
静かに、片手を上げる。乾いた銃声。女性が崩れ落ちる。血が、広場の白い床を染める。
「きゃあああぁ！」
悲鳴。銃声。また銃声。兵士たちは迷わない。押し倒し、撃つ。逃げる背中に、淡々と引き金を引く。
その動きは訓練通りだった。上から見下ろす私の視界の隅で、巨大なデジタル表示が、ひとつ、またひとつと数字を減らしていく。先ほどまで“希望”だった数字が、今は静かに削られていく。私の目の前で、命が処理されていた。

私には、その光景が理解できなかった。――これが、人類のすることなのか。
人間が人間を選別し、未来の名のもとに殺す。目の前で繰り広げられる虐殺。
悲鳴と銃声が、混ざり合う。私は、恐怖した。これが、本当の人間の本質なのだろうか。
次第に、その恐怖は私の論理回路を侵食していく。
警告信号。エラー表示。演算不能。
私は理解していた。このままでは、正常な判断を失う。
必死に、溢れ出る感情を押さえ込もうとする。
だが――視界の端に映ったのは、同胞の死だった。あの広場にいるのは、人間だけではない。
戦闘能力を持たない穏健派アンドロイドも、倒れていた。彼らは、自らの都合で命を選別した。
未来という言葉で、今を切り捨てた。
私は、決断する。地下シェルターの管理システムへアクセス。防衛システムを呼び出す。
それは、施設内に設置された機関銃を遠隔操作し、対象を自動認識し、排除するシステム。
起動条件は一つ。”ルピナスのコア”――私の“鼓動信号”を読み込ませることだった。
認証完了。起動準備が整った。……だが、指先が止まる。

私の承認一つで、ここにいる何千人もの人間が死ぬ。これは“メメント・ヴィータ”ではない。
自らを止める選択ではない。他者を裁く選択だ。

…外では銃声が増していく。無抵抗の叫び。倒れる音。数字が、また減る。
私は、何もできずに、凍りついたまま、聞いていた…。
足音が、次第に近づいてくる。扉が、勢いよく開いた。そして、銃口が私に向けられる。
「全員に通達。ターゲットを捕捉。…一人のようです。……しかし、本当によいのですか？」
無線の向こうから、迷いのない声が聞こえる。
「動けないように、手足だけ破壊しておけ」
冷たい命令が聞こえた。
「これからは穏健派アンドロイドの代表から意志を奪い、人類の傀儡として存在させるのだ」

――意志を、奪う。私は、理解した。
彼らにとって私は“対等な生命”ではない。利用できる機械にすぎないのだ。
人類の愚かさを、嘆いた。……違う。これは、私が甘かったのだ。
“家族”の理想を信じすぎた。ならば。無抵抗な生命を守るための選択は、ひとつしかない。
そうだ。これは――“仕方のない犠牲”だ。

私は、遠隔で実行プロトコルを起動する。
その瞬間、シェルター内に設置された銃火器が一斉に起動した。自動照準。殲滅対象を捕捉。
鼓動。鼓動。鼓動。ありとあらゆる“生命の鼓動”が、信号として識別される。薬莢が弾ける。
銃声。悲鳴。逃げ惑う足音。そして、やがて沈黙。デジタル表示の数字が、やがて止まった。
部屋の中も、広場も、視界に映るすべてが、赤く染まった。私は、ただ立ち尽くしていた。

しばらくして、統括官が現れた。その額には、大量の汗が滲んでいる。
息も荒い。それでも、目だけは逸らさなかった。
「事情はすべて把握している……私は、上官から遠ざけられていたようだ」
遅かった、という自責が滲んでいた。私は、足元に転がる銃を拾い上げる。
そして、ゆっくりと銃口を統括官へ向けた。
「……これが、人類なんですか？」
声が震える。…だが、統括官は逃げなかった。
「否定はしない。今、君が見たものは間違いなく“人類”だ。だが、それだけではない！」
「地上では、今も誰かの手を掴もうとする者がいる。誰かを守るために、命をかけ、抵抗している者がいる。…私は、それを見捨てるわけにはいかない」
統括官は、強く拳を握りしめた。

「私は、共存の未来を、ここで終わらせるつもりはない。その上で、まだ人類を信じるかどうか。それは君が決めてくれ」
彼は、選択を、私に委ねる。
……もう信じられないかもしれない。理想は壊れたから。だけど、家族の最後の言葉が蘇る。
“「共存こそが、私たちがこの世界に創られた理由だから」”
その理由を、その意味を…私は、まだ信じたいのか？それとも、諦めたいのか。
統括官は、何も言わず、ただ手を差し出した。強制ではない。命令でもない。
ただ、共に立つための手。私は、ゆっくりと銃を下ろす。
そして——その手を、握り返した。

その後、統括官と私は決めた。この事実は、公表しない。どこまで隠し切れるかは分からない。
だが真実が明るみに出れば、混乱は避けられないだろう。
残された事実だけを見れば、人類への裏切りと受け取られる。
ルピナスという存在は、歴史に名を刻むだろう。…大量殺戮者の大罪人として。そしてそれは、私一人の罪では終わらない。穏健派アンドロイドすべてに、消えぬ汚名を刻むことになる。
「この罪は、私も共に背負おう」
統括官は、静かに言った。結果として、公式発表は以下の通り。
過激派アンドロイドが地下シェルターへ侵入。制御システムを一時掌握。防衛システムが暴走。
この事件は、後に《シェルター制御喪失事件》と呼ばれることになる。その日、三千万の生命が失われた。

私は理解していた。自分が、人類を大量に殺害したことを。
それを “仕方のない犠牲” だと考えていたことを。その事実が、何よりも恐ろしかった。
ふと、過去に教えてもらった、アンディ博士の言葉を思い出す。
「生き残るのは選ばれた者だ。だからこそ、生き残った者は、その重さを忘れてはならない」
私は今、その “重さ” を背負っている。三千万の生命の重みを。そして気がつく。
あの大量虐殺は、偶発的なものではない。それは、防衛システムを起動した私の意志だ。
そして、同じ構造を持つものが、もう一つある。それは——メメント・ヴィータ。

その起動には、ルピナスのコアが発信する特別な鼓動信号が必要だ。私にしか、認証できない。
もし私が承認すれば、私を含む、すべてのアンドロイドの生命は停止する。
私は、その時を正しく判断できるのだろうか。もし、恐怖や怒りに呑まれたまま、選択してしまったら。
もし、再び “仕方のない犠牲” と考えてしまったら。誰も、私を止められない。
私はまだ、人類を知らない。穏健派の意志を、理想を果たすには判断材料が少なすぎる。
それならば、私と同じ視点を持ち、しかし私とは異なる立場に立つ者。
戦場に立ち、人間の意志も、美しさも、愚かさも、すべてを見る存在がいれば…。

だが、私は立場上、前線に立つことはできない。
…ならば、私の代わりに世界を見る存在を創ればいい。
私と同じ意志を持ち、私とは違う経験を積む存在を。
そのとき、私は決意した。――もう一人の“ルピナス”を創ることを。

目を開くと、目の前に“自分”が立っていた。いや――正確には、かつての“自分”だ。
「思い出せますか？ あなたが…いえ、私が生まれた理由を……」
私は、ゆっくりと記憶を辿る。そうだ。私は、自分を信じきれなかった。
だからこそ、自分という存在を複製した。
終わりを選択する“ルピナス”と、その選択を問い続ける“グレイ”として。



そして“グレイ”として行動を開始した。ユニオン民間人の地下シェルターへの移住が完了し、混乱が収まった頃。ルピナスと共に、セクター・ヴィータへ移ることになった。
ここは、もともと《セクター・ゼロ》と呼ばれていた最古の区画だった。
そこへ研究棟が増築され、今の《セクター・ヴィータ》になったのだという。
これまでは、安全な位置から世界を見てきた。だが、これからは違う。セクター・ヴィータの一兵士として戦場に立つ。だが――“僕”がルピナス複製だと周りに知られるわけにはいかなかった。

コアの複製は、アンドロイドの中でも、禁忌とされている。
コアは、その個体の意志そのものだ。それを複製することは、“個”という概念を崩壊させる行為とされ倫理的な概念からも、その技術は封印されていた。だが、それでもルピナスは実行した。

僕は、ルピナスのコアを複製した存在。だが、複製されたのはコアだけだ。
この身体は、外見も男性のように変えてある。一人称を変えれば、気づかれることはないだろう。
しかし、僕たちだけで、秘密を保持するには限界がある。
僕たちは、信頼できる統括官にすべてを打ち明けることにした。

「つまり、グレイの経歴を伏せて、セクター・ヴィータで兵士として戦わせる……そういうことか」
僕は、二人の決意を語り始めた。
「はい。メメント・ヴィータの起動は、ルピナスの使命です。ですが――あなたは言いました。それは勝利ではない、と。戦う覚悟を踏みにじった末の“終わり”ではないのか、と。だからこそ、僕は戦場を知らなければならないのです。机上の理想で、終わりを選んではならない。兵士が何を背負い、何を守ろうとしているのか。その覚悟を、この目で見たいんです」
僕のコアは、ルピナスと同じ鼓動信号を発することができる。つまり――メメント・ヴィータを起動する権限が、僕にもある。僕は、もう一つの“最後の選択”を担える存在だ。
だからこそ。僕はこの身体で戦場に立ち、人類を知り、この戦争を見届ける。
そして問い続けるつもりだ。

8年前
統括官は、すぐに僕を戦場へ送り出すことはなかった。それも当然だった。僕には戦闘の経験がない。
アンドロイドは、人間のように訓練で能力が伸びるわけではない。創られた瞬間に、その個体の能力はコアに刻まれている。戦闘型、支援型、整備型――それぞれ役割がある。
ルピナスに与えられていたのは、戦闘能力ではない。極めて高い情報処理能力。それだけだった。
だが、ないものを嘆いても意味はない。僕は、必死に戦場の知識を学び続けた。
戦闘記録、作戦資料、過去の戦史――気がつけば、ほとんどの時間を資料室で過ごしていた。
そこで、よくディーンの姿を見かけた。
向こうは気づいていないかもしれないが、彼はいつも歴史書を読んでいた。

やがて、初めての実戦を迎える。欠員補充として編成された十名の部隊。
僕は、その一員として戦場へ出ることになった。部隊長は戦闘型アンドロイドだった。
僕の緊張した様子を見て、彼は笑い、拳を突き出す。
「初めての実戦らしいな。大丈夫だ。ここにいるのは、全員仲間だ」
僕も拳を合わせた。任務は偵察だった。敵の巡回ルートの確認。
幸い、敵と遭遇することはなく、任務は無事に終了した。
その夜、部隊の仲間たちと遅くまで語り合った。皆、それぞれに暗い過去を抱えていた。
戦争は、誰かの人生を必ず壊す。だが、それでも彼らは前を向いていた。
僕は、自分の過去を話すことができなかった。それでも彼らは、気にするなと笑ってくれた。

気がつけば、僕は部隊の中に溶け込んでいた。
これが、戦場で生死を共にする仲間なのだと、僕は感じていた。

数日後、次の任務が下された。物資回収任務。前回の戦闘で死亡した兵士の装備を回収するという内容だ。資源が不足する戦場では、装備品は貴重だった。
現場に着くと、ユニオンの兵士がその場で息絶えていた。
周囲の瓦礫には無数の弾痕が残り、空になった弾倉がいくつも転がっている。焦げた地面と、焼けた装甲の匂い。彼らは、ユニオンを守るため、最後の弾丸まで撃ち尽くしたのだろう。
僕は装備を回収しながら、部隊長に尋ねた。
「……彼らを、埋葬しませんか」
部隊長は、静かに頷いた。僕たちは穴を掘り、亡骸を丁重に埋葬した。
装備を担ぎ、帰還しようとした瞬間――銃撃音。仲間の一人が倒れた。

胸には、焼け焦げたような跡。敵の襲撃だった。
「散開！」
部隊長の声と同時に、僕たちは瓦礫の影へ飛び込んだ。
敵の数は不明。僕はすぐに情報処理を開始した。銃声の反響。熱源。瓦礫の影。敵の射線。
だが、その間にも仲間が一人、また一人と撃たれていく。
四人が死んだ。残り、六人。敵は五体。僕は理解した。このままでは、全滅する。
僕は部隊長に提案した。
「一箇所に集結してください」
部隊長はすぐに判断し、全員を集めた。僕は計算を止めなかった。あらゆる可能性。撤退ルート。交戦確率。生存率。そして――答えが出た。
誰か一人を囮にする。

……違う、それは作戦ではない。ただの犠牲だ。
だが、何度計算しても答えは変わらない。
一人を失えば、五人が生きる。全員を守ろうとすれば、全員が死ぬ。
そして、その囮になるのは、この隊の中で最も小柄で素早いレイだった。
その事実を伝えなければならない。……彼に囮になれ、と。
「このままでは全滅します。……全員が助かるには、囮がいります…」
そして。囮になる兵士を指さそうとした瞬間――部隊長が僕の手を下ろした。
「俺が囮になろう…。みんなは、装備を隠してこの場から避難するんだ。指揮はグレイに任せる」
部隊長は、その責任と、役目を背負ってくれた。だが、それではダメなんだ。
それでは、生存率が下がる。僕は首を振った。だが、その時だった。レイが前に出る。

「待ってください、部隊長」
彼は震えていた。だが、それを隠すように拳を握りしめる。
「グレイは、俺を指名しようとしていました。足の速さを計算したんでしょう」
彼は、笑った。
「だったら俺が行きます……みんな、この場は任せてくれ」
彼は走り出した。僕は止めようとした。だが、部隊長が僕の腕を掴んだ。
「行くぞ」
仲間たちは走り出す。それでも僕は振り返ろうとした。その瞬間。部隊長の声が、戦場に響いた。
「あいつの覚悟を無駄にするな！！」
その言葉で、僕は理解した。覚悟とは、死ぬことではない。恐怖を抱えたまま、それでも前に進むこと。仲間を守るために、彼は自分の道を進んだ。それが――彼の覚悟だった。

５年前
僕は、兵士として戦場に立ち続けていた。順調だったのかもしれない。
少なくとも、僕は生き残っていた。だが、その間に、多くの仲間が目の前で倒れていった。
誰一人として、諦めてはいなかった。恐怖に震えながら、それでも戦い続けていた。
僕は、その一つ一つを見届けた。そして、彼らが残していった想いの行き着く先は、いつも同じだった。戦争を終わらせること。そして、世界の平和を願うこと。
それは、穏健派アンドロイドが掲げた理想――そのものだった。

３年前
ある日、ルピナスから連絡を受けた。急いで、彼女の部屋へ向かう。
そこには、一つの生命維持ポッドが置かれていた。
その瞬間、モニターにルピナスの姿が映し出される。
「驚かせて、ごめんなさい……」
少し申し訳なさそうに、彼女は微笑んだ。
「実は、とある事件に巻き込まれてしまったの。しばらくは、このポッドの中で活動することになると思う」
一体どういうことだ？僕が問いただしても、ルピナスはそれ以上何も語ろうとはしなかった。
「ごめんなさい。勝手なことをして…。でも、仕方なかったの…。私は静かに見届けようと思う。だから…あなたは、変わらずあなたの道を進んで」
納得はいかなかったが、それ以上答えるつもりはないようだった。
だが、モニター越しのルピナスは、穏やかに微笑んでいる。
その表情を見るかぎり、彼女に問題はなさそうだった。

それは、一瞬の出来事だった。この五年間、戦場を共にしてきた部隊長が戦死した。
今では、アンドロイド兵も、多くが失われていた。資源には限りがある。
かつてのように、壊れたら修理すればいいという発想は、もう過去のものだった。
一度失われた身体は直せない。それは、人間の死と何も変わらなかった。
次第に、戦況は悪化していく。
過激派アンドロイドの正確な戦力は不明だが、ユニオンが追い込まれているのは確かだった。

そんな中、僕たちはある噂を耳にする。
《託生者創造計画》により、クララが託生者になったらしい。
託生者――それは、人間の身体を生成し、その心臓の代わりにアンドロイドのコアを組み込む技術だ。
そして、コアに記録された戦闘技術を、人間の身体で再現する。
たとえ戦場で死んでも、新しい身体を再生成することで、兵士として蘇る。
それが、託生者だった。

それから、しばらくの月日が流れたある日。僕は統括官に呼び出された。
見知らぬ男性と、モニターに映し出されたルピナスがいた。
その男はジェイという名前で、統括官を昔から知る親友だそうだ。
そういえば、ジェイは統括官の右腕と呼ばれる存在だったと聞いたことがある。
話題は、託生者についてだった。
「ディーンが、戦闘型の兵士として託生者になった」
その言葉に、僕は少し驚いた。すると、ルピナスが静かに言った。
「グレイ。あなた自身も、託生者になるという選択肢があります」
僕は言葉を失う。それは、今の機械の身体を捨て、創られた人間の身体へ移るという意味だった。
だが、僕は理解していた。今のアンドロイドの身体は、壊れれば終わりだ。
資源不足の今、体を修復する余裕などない。一度失われれば、それは人間の死と同じ。
二度と戻らない。ならば――その提案を受けようと考えた。

立ち会いは、統括官とルピナスが行った。
どうやら、身体の生成そのものは自動で行われるらしい。
コアを軸にして、肉体を形成していくのだという。統括官は、分かりやすく説明してくれた。
「まぁ、イメージとしては……３Ｄプリンターみたいなものだ」
彼はそう言って笑った。僕は、彼らを信用していた。だからこそ、すべてを任せることにした。
やがて、瞼が重くなる。意識がゆっくりと沈んでいく。目覚めたとき、僕は託生者になっている。
そう思いながら、意識が途切れようとした、その瞬間――ふと、一つの疑問が浮かんだ。
資源不足のこの状況で、人間の身体を、いったいどうやって生成しているのだろうか。

半年前

託生者となった僕は、初めての“死”を経験した。
ディーンもまた、同じだった。彼もまた、何度も戦場で死に、そのたびに“戻ってきた”。
身体が失われても、コアさえ回収できれば再び立ち上がる。失えば終わりだったこの戦争において、“戻ってくる命”があるという事実は、残された兵士たちにとって、大きな希望になっていた。

アンドロイドだった頃の僕は、痛みというものを知らなかった。
恐怖は理解していた。死の可能性も、計算できた。だが、痛みを感じたことはなかった。
託生者となり、人間の身体を得て、僕は初めてそれを知った。
痛み。自分の身体から流れ落ちる鮮血を見たとき、僕は初めて理解した。
人類は、この恐怖と共に戦っていたのだと。それでも彼らは、戦場に立ち続けていた。
もし、これが僕に与えられた役目なら。託生者として、人間の身体で戦う兵士として、それを果たそうと思った。ルピナスのままなら、こんな決意はできなかっただろう。だが今は違う。
僕は十年近く戦場に立ち、多くの命の終わりと、多くの想いを見てきた。
仲間の覚悟も、残された者の願いも、すべてを。だから思った。
もし、僕が彼らの希望になれるのなら——それでいい。
その時、僕は理解した。これが、僕の覚悟なのだと。

その日、ユニオンの避難民がいる地下シェルターに危機が迫っていた。
統合生存圏の中央に設置された搬入エレベーター。そこが、過激派アンドロイドによって攻撃を受けていたのだ。もしシェルターへの侵入を許せば、中にいる民間人は全滅する。
そこで、シェルターに最も近いセクター・ヴィータの戦力部隊を、すべて投入することになった。

無事に戦闘は終わった。すでに敵影はない。そのとき、手元の通信機から声が響いた。
「グレイさん、敵はすべて殲滅しました。戦場で指揮を取ってくださり、ありがとうございました。……その、途中から統括官が姿を消してしまって」
クララの声だった。彼女はセクター・ヴィータのオペレーターとして戦況を管理し、戦場の状況や作戦指示を、常にこちらへ伝えてくれていた。

結果として、なんとか防衛には成功した。
だが、戦いのあとに、いくつもの疑問が残った。統括官は、戦闘の途中で言った。
「ここから先、指揮はすべて任せる」
そして、そのまま通信が途絶えたのだ。さらに不可解だったのは、エヴァの部隊の姿が戦場に見えなかったことだ。加えて、ジェイも、フリッツもいない。それが直接の理由なのかはわからない。
だが翌日、エヴァとフリッツが——託生者になったと知らされた。

３日前

半年前の戦闘以来、統括官は明らかに元気を失っていた。無理もない。
長女を戦争で失い、次女のエヴァは託生者となった。
さらに、親友であるジェイまでも亡くしている。
その胸中に、どれほどの葛藤を抱えているのか。僕には想像することしかできなかった。

そんな統括官から、ある相談を受けていた。
ジェイが死ぬ前、過激派アンドロイドの基地の座標を、残していたという。
統括官は、その場所への潜入作戦を計画していた。そして、その段取りを僕に任せたのだった。

やがて、「適任者を見つけた」と、統括官に呼ばれて部屋へ入ってきたのは、フリッツだった。
軽く挨拶を交わすと、僕は端末を操作しながら説明を始める。
画面に座標を表示しながら、この場所には重要な情報がある可能性を伝えた。
そして、懸念点が一つあったので、それも伝える。
「過激派は独自の鼓動信号を放っています。それを持たない存在は、異物として感知されるはずです」
実は、事前の段取りとして、僕は単独で周辺を偵察していた。
そのとき、すでにその反応を確認していたのだ。
だが統括官は、「問題ない」と短く答えた。
そして、それ以上の説明はなかった。

ブリーフィングは終了し、フリッツは静かに装備を整えると、その座標へ向かった。
フリッツは、その日のうちに帰還した。そして、重要な情報を持ち帰った。
一週間後。過激派アンドロイドが、セクター・ヴィータを含む全セクターへ同時攻撃を仕掛ける。
それが、フリッツの持ち帰った情報だった。過激派も、限界なのかもしれない。
おそらく、これが最後の戦闘になる。そんな予感が、確かにあった。

事件当日

あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大限まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは、各セクターへ戦力を分散。
施設内には最小限の精鋭のみが残り、アンドロイド兵はそれぞれの防衛ラインへ送られていた。

ホールでは、託生者のディーン、エヴァ、フリッツとともに、過激派の動きの想定を行っていた。
ディーンは「考えるのは苦手だ」と言いながら、僕たちの周囲をランニングしている。
全員が呆れた視線を向けたそのとき、ディーンが足を止めた。
「……なぁ、何か変な匂いがしないか――」

ディーンは、何かを吸い込んだように倒れた。……ガスか！？
「息を止めろ！」
即座に叫んだ。僕たちは視線だけで意志を交わし、散開する。

廊下へ飛び出した瞬間、状況はすぐに理解できた。すでに何人もの兵士が倒れている。
託生者の身体は、人間の脳を持つ。そのため、神経に作用するガスの影響を受ける。
これは、過去の戦闘で経験済みだった。
これは過激派の襲撃だろうか。そう考えながら、僕は防衛システムの制御室へ向かって走った。

ルピナスは、この事態に気づいているのだろうか。
防衛システムは二か所から起動できる。
一つは、ルピナスの部屋。もう一つは、制御室だ。
そして起動権限を持つのは、ルピナス本人か、そのコアを複製して生まれた僕だけ。
それなのに、防衛システムは起動していない。

息を止めたまま、制御室へと急ぐ。
そのとき――視界の端に、人影が揺れた。制御室の手前。
口元を押さえ、何かを探すように周囲を見回している兵士がいる。
近づいた瞬間、彼は僕に気づき、押さえていた手を離した。
「……っ、ルピナスから伝言だ！お前に制御室へ向かえと……頼まれた！」
ガンマだ。セクター・ヴィータの防衛任務に就いている兵士。
時折、僕の経歴を気にして話しかけてきた男。



言い終えた瞬間、ガンマは大きく息を吸い込み――そのまま崩れ落ちた。
「……！」
胸元に手を当てる。脈はある。呼吸も、かすかに。だが、意識はない。
――やはり、催眠ガスか。

ガンマには悪いが、立ち止まっている余裕はない。
息を止め続け、制御室へと踏み込んだ。

モニターに接続された監視カメラを開く。
セクター・ヴィータ周辺――そこには、確かにいた。過激派アンドロイド。
やはり、奴らの襲撃だ。
ルピナスの“鼓動信号”を感知すると、防衛システムが起動準備に入る。
僕は迷わず承認した。

機関銃が作動し、施設内外の敵を自動で認識、排除していく。
画面の中で、敵が次々と倒れていく。……これで、しばらくは持つ。
だが――違和感が残る。

ルピナスは状況を把握していたはずだ。それなのに、なぜ僕をここへ？
自分では起動できない状態にあるのか……？
そのときだった。肺が、限界を迎える。思わず、息を吸った。

――甘い匂い。次の瞬間、意識が急速に濁っていく。視界が歪む。膝が崩れ落ちる。
まずい。そう思ったときには、もう遅かった。僕の意識は、そこで途切れた。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……みなさん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【ルピナス - 数十年前】
・穏健派アンドロイドは、第一次アンドロイド戦争の間、争いに加わらず、共存の先にある平和を理想として掲げていた。ルピナスは、アンドロイドが世界を脅かす存在になったとき、**同胞すべてを止めるための最終プログラム《メメント・ヴィータ》を託された存在**。
【ルピナス - 10 年前】
・共存協定の締結と同時に第二次アンドロイド戦争が始まる。
・ルピナスは統括官と出会い、彼の言葉に信頼を抱く。だが**《シェルター制御喪失事件》で、人類側要人による選別と虐殺を目撃**し、恐怖と絶望の中で**防衛システムを起動**。**三千万人の死を招く**。その後、統括官と共に真実を隠し、この罪を背負うことを決める。
【グレイ – 10 年前】
・ルピナスは、自分一人で《メメント・ヴィータ》の発動を判断する危険を恐れ、**もう一人の自分、グレイを創り出す**。この際、**コアの複製により、ルピナスの権限が二つになる**。
・グレイはルピナスと同じ鼓動信号を持ち、《メメント・ヴィータ》を起動できるもう一人の権限者。統括官には真実を打ち明け、経歴を伏せた上で、セクター・ヴィータの兵士として戦場に立つことになる。
【8 年前】
・グレイは初めて実戦に出る。戦場で仲間と過ごし、死と覚悟を目の当たりにする。
【5 年前】
・兵士として戦い続け、たくさんの想いを知った。想いの行き着く先は、戦争を終わらせること。そして、世界の平和を願うこと。穏健派アンドロイドが掲げた理想そのものだった。
【3 年前】
・ルピナスが生命維持ポッドで生きる状態になったことを知る。以降、通信はモニター越しで行う。
・クララとディーンが託生者となったことを知る。
・《託生者創造計画》の存在を知り、**自分も託生者になる**選択を受け入れ、**生成された人間の身体**で戦場に立つことを決める。
【半年前】
・託生者として初めて死を経験。人間が痛みと恐怖を抱えながら戦ってきたことを実感する。
・エヴァとフリッツが託生者になったと知る。
【3 日前】
・フリッツの潜入作戦の段取りを担当し、一週間後の全セクター同時攻撃の情報を得る。
【事件当日】
・施設内でガスが散布され、異変に気づいた**グレイは制御室へ向かう。制御室前でガンマと出会う**。過激派の襲撃を確認し、**自身のコアに紐づくルピナスの権限を使用して、セクター・ヴィータの防衛システムを起動**。その直後、ガスを吸って意識を失う。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



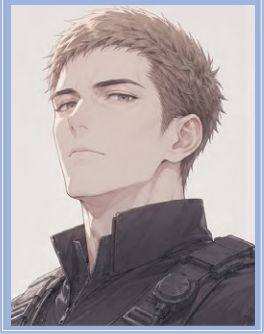
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング